

佐賀県立博物館報 No.49

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947

木造如意輪観音坐像

鎌倉末～南北朝時代

東松浦郡相知町梶山 観音堂
像高 七一・〇センチメートル

如意輪観音は、持っている如意宝珠で財宝・福德・知恵を授け、法輪で煩惱を打ち砕く功德を持つということで一般に信仰され、また、膝を打ち砕く功徳を持つということで一般的な坐り方をしているところは人間的で、人々により親しまれてきたところである。

本像は宝冠（後補）をいただく一面六臂の通形の如意輪



観音坐像でヒノキ材、寄木造、玉眼、額に水晶の白毫をつけ、首に三道を刻んでいる。顔は丸形で張りのある豊かな頬を持ち、伏し目にした目に対し大きく弧を描いた眉は力強い。いっぽう、衲衣の衣文線は彫りが深く、適確に対象をとらえて写実的に表現している。

本像にみるこのような張りのある面貌と、彫りの深い衣文の彫法は鎌倉時代慶派の作風を伝えており、眼下の鎌倉彫刻の中で、中央の作風をとどめている数少ない作例として貴重である。

目次

- 木造如意輪観音坐像…………… 1
- 資料紹介 1～5…………… 2～7
- 博物館日誌・行事のお知らせ…………… 8

当館では展示活動とともに、資料の調査とその解明にあたってきました。その結果、我々祖先のくらしを考えるうえで各種、貴重な資料の存在が明らかになってきました。これらの資料をおりにつけ紹介したいと考えております。今回は仏像彫刻と鳥類について紹介します。

資料紹介 1

木造阿弥陀如来坐像 藤原時代

所在地 鳥栖市幸津町 天満宮薬師堂

本像はヒノキ材による寄木造りで、造像の当初から漆箔が施されていたと思われるが、現在の漆箔は近世の修理の際に彩色されたものである。

像高87.4釐、ほぼ等身大の坐像で、左足を前に組む結跏趺坐をし、右手は肘を曲げて掌を前に向く、第一指と第四指を捻じたいわゆる阿弥陀如来の「下品下生」に当たる印を結び、左手先は膝の上に安んじて軽く指を曲げ、後補の葉壺を載せている。

本躯の構造は、近世における二度にわたる補修と彩色により判明しにくいところがあるが、頭部は頭（肉髻）の頂きから両耳にかかる線で堅に削いでいる。つまり前後二材を寄せて頭部をつくっている。この前後の二材は元来一材であったものを割り、内割りをしたのちに削ぎつけたものか、それとも別材を寄せたものかは不明である。

頭部は三道の下あたりで削ぎ付けたと思われるが、彩色が厚くてこれとははっきりとしない。

胴部の方は頭部と同様彫の両側を堅に削いで、前後二材でつくっているものと思われる。両側の膝奥にあたる大腿部のつけ根の部分には三角材を削ぎ、結跏趺坐する両足は横木の一枚から彫り出している。右手は肩・肘・手首で削ぎ、左手は肩と袖口で削ぎ付け、左手先は袖口に差し込みとなる。胎内の状況は、地着きの部に修理の際に底板が張られていて内部をうかがうことはできないが、像の重量からして、また像を傾けると部材が離脱したのかコロコロと音を発するところから、内割りが施されているものと推定される。

様式についてみると、螺髪は彫り出し、肉髻は割合大きく、そして高く、地髪部との境目ははっきりとしている。螺髪は小粒で、髪際での数は三十八個、上下十八段を数える。螺髪を正面より見ると髪際で横に並ぶため、ほぼ左右に平行しているが、後頭部にゆくと頂に向かってV字形を重ねた形に並んでいる。

面相の目鼻立ちの彫り口の線は、後補の彩色で明瞭さを欠く。両眼は眼で上下の輪のみひらき弱く、眦は切れ上がり気味ではあるものの、伏見がちのおだやかな印象を与え、両頬から頰にかけての内付きは、まことによく整った相好をつくっている。

髻部は肩が張り、加えて厚い胸に対して胴をころよく引き締め、しっぺりとした肉どりの構成である。

衲衣の衣文は左肩から垂下し、右脇から腹前にかけては横に走るが、この衣文の彫法は浅く整って、1つの型にはまった形式化がみられる。

後補されたものについて記すと、右手の肘から先の前腕の部分と手先は後補と思われる。特に指先は彫りか確拙で、手の甲の肉取りには無理があり、近世の修理の際つけ加えたものであろう。左手袖口および袖口に差し込む掌、その掌に載る葉壺も後補で、特に左手先の分厚い肉取りなどは、指の機能のぶさを感じさせ、近世修理の際の作とわかる。また膝前や裳先も修理の手が加えられて当初の面影はなく、衣文の線の不自然さ、造形にみる彫法の拙劣さは一見して後補されたものであることがわかる。そのほか右肩の肉付きが左肩に比して薄く、肩が落ちて見えるのも修理の際、削り落とされたためであらう。

時代は

- (1)造像の本寄せの法や衣文の彫り口は定模様をとどめている。
 - (2)螺髪は小粒で肉髻も高く、胸厚や頭髻部のモデリングは藤原時代後期の作風である。
 - (3)衣文の彫法に形式化が見られる。
- 以上のことなどから推定して藤原時代後期頃地方仏師により造像されたものと思われる。

底銘

料銭 拾三貫文
 慈覚大師御作
 薬師如来
 養父郡 幸津村
 本地堂裏安置之
 于時文化十^八百年四月八日再興
 一真 三世魯孔聖 欽書
 仏師 京都住 運弘彩色
 願主 當村中 敬白
 天保二十丑十一月
 大阪
 奉再建 仏師山中猪之助

総高	87.4釐	腹厚	26.3釐	胸厚	22.3釐
髪際下	73.0 〃	膝奥	52.0 〃	肘張	51.7 〃
面長	16.2 〃	面奥	20.0 〃	膝張	51.3 〃
面幅	16.6 〃	肩幅	43.3 〃		

資料紹介 2

木造阿弥陀如来坐像 鎌倉時代

佐賀郡川副町南里 正定寺

像はクス材を用いた一本造りで、頭部、髻部は両肩をふくめ肘前までを一材から彫り出しているが、ただ背面には薄い背板を削ぎ付けている。膝前の部は前腕の袖、それに続く両手先を横木の一枚に刻んでそれを髻部に着

けている。この像には内割りは施されていない。

両眼は彫眼で、上下両脛のみひらきは強くはないが眦の上がり強い。螺髪は彫り出しの少ない浅い刻みで、全体に粗製であり、髪際での数は30粒、それに地髪三段、肉髷部十粒よりできている。鉢形の肉髷はそれほど高くもなくおだやかである。

孤伏の肩、眦の上がった目、それにひき締まった口もとと頬とから受ける印象は、男性的である。

体貌としては肩の張りはあるが、胸を広くあけた衲衣の間よりあらわれた体の肉付きはやや薄く、側面の厚みも足りない感がある。したがって脇下から両肘にかかる衣にだぶつきが目立つ。

通肩に着た衲衣の彫りは浅く、おだやかな感じを与えている。側面や背面の衣文は省略して最小限にとどめており、特に背面では右肩から垂れる衲衣の縁をあらわしたにとどまっている。

手は腹前に上品上生のいわゆる弥陀定印を結んで置き、足組は右足を前にして結跏趺坐する。

彩色は後補で、胡粉に淡く着彩をして、素木像の趣きを出しているものと思われるが、これは、本来増像風の男性的像であったことを物語るものかも知れない。袈衣及び薬壺も後補である。

本像は寺院によると薬師如来であるとの伝承があるが、前述の通り弥陀定印を結ぶ阿弥陀如来として造像されたものである。しかし、後世になって当地方の薬師信仰の中で秘仏とされ薬壺が付され、薬師如来として信仰されるようになったものと考えられる。

寛文5年(1665)、大木惣右衛門が著わした「肥前古跡縁起」には

川副庄、一木七佛薬師如来は行基菩薩の御作、聖武天皇の勅願也、楠一本を以て尊形七佛を作り給ふ、依て参詣の輩は元木より参初て木の末にて詣で納む、抑川副七佛一番の堂場は徳富村の東光寺、二番には寺井の長福寺、三番には崎江の法源寺、四番には米納津東光寺、五番には南里正定寺、六番には新郷本願寺、七番には袋村の寒若寺の薬師堂にて参納む、貴賤道俗せきあへず衆生悉除の本願に頼を掛けて一筋に祈る、験の類無き靈佛にてぞ在ける、………

と記されており、また天保4年(1833)深江三太夫が記した「肥前国佐賀領見聞記にも佐嘉七佛薬師として紹介されていて、江戸時代にはすでに靈験のある薬師如来として尊崇されていたことが知られる。

像高	57.0	種	肩幅	30.6	種	髻高	(4)	8.0
髪際下	50.0	種	胸厚	14.0	種	(4)	8.0	
面長	11.0	種	腹厚	18.0	種	膝奥	35.0	
面奥	15.0	種	肘張	47.5	種			

資料紹介 3

木造阿弥陀如来坐像 鎌倉時代

鳥栖市田代町 西清寺

西清寺は浄土宗の寺院で、近世、この地方を知りした対州藩主宗氏の菩提寺である。西清寺縁起によれば、大同元年(806)天海僧正の創建になる天台宗の古刹と伝えられている。

本像は今日光背を失い、後補の岩座上に本髻のみがもと姿を伝えている。

面貌は伏目がちな像が多いなかで、本像は他のものよりやや顔を上げ正視する。印相は左右の手とも第1指と第2指の指頭を合わせて輪をつくり、これを腹前で組み、右足を前にして組む結跏趺坐したその足組みの上に安んじる「上品上生」の弥陀定印である。

像は髪際下40.0種で、ヒノキ材、一木造り、彫眼、白毫を水晶とし、三道を刻む。

剣出の螺髪は半球形で粒は割合小さく(髪際で螺髪が31個並ぶ。但し3個の欠した分を含む)整然と切り付けており、頂の肉髷の形は地髪部とともにそう高いものではなく、おだやかで、肉髷の輪形と地髪部との境はあまりはっきりしない。目は眉目の間割と詰まり気味ではあるが、両眼のみひらきは強い方で、切れは長く明快で男性的でもある。両頬の肉付きには臆感があり、然もその張りはひき締まって鎌倉時代らしい力強さを端的に示している。

両肩の張りも強く、胸を広くひろげた衲衣の間にあられる胸の広さと厚味は印象的で、腹部で帯をひき締め、次いで膝に張りをもちたせて下ひらがの構成にし、像全体の安定感をもたせている。ただ肉厚を表現する三道や、胸、腹の彫り出しには技法の粗放が目立ち、地方佛師の作を想定させる。両肘は弥陀定印を結ぶため心もち外方に張っている。左肩から腹前に流れる衣文は割に太目で、数条のひだが単純に平行して腹前へとくだる。膝前の衣文も同様にして左右の膝にかかっている。

髻の側面は頬が豊かで面幅が広がったように、面の奥行きも深い。髻の厚みも胸から腹へ増し、地着きのあたりでわずかに内側へくり込むだけで厚味もあり、体貌もしっかりしていて均整がとれている。

背面では切り付け螺髪がやや荒目に刻まれてはいるものの、これを省略することはせず、ただ背面の衣文は、右肩下から右腰部にかけて省略している。

像の構造をみると、体部のおおかたは一材から木取りされ、後頭部直下の頸部から両肩を通り地着きに至る背面は、背中の中心線を左右に二材の背板が当てられており、ここより内割りがされているものと思われる。内割りは、像底に底板が張られていて像内をうかがうことはできないが、地着部の肉厚が約1種程度であることから、かなりいいわいにおこなわれているのではないかと推察される。両肩は堅材を刳いている。つまり右腕は付根を刳ぎ、また右手肘先から手首を刳いている。左腕も付根と左袖側面とを刳ぎ、前腕を覆う袖口近くで袖から手首

の部分を知ぐ。また両側の腿の付根の部分を知ぎ付け、膝前も刻いだ大きな横木の一材から木取りされている。裳先は、元来知ぎ付けであったものが、今日では刻目から先を失っている。

この像は全体がほぼ暗褐色を呈しているが、髮際付近の螺髪には黒色を帯びた部分があり、頭部には墨が塗布されていたものであろう。他の肉身部・裳・目・口唇には彩色の痕跡が認められないので、あるいはもともと彩色や漆箔が施されていない素木像ではなかったかと思われる。

本像は鼻頭・左の耳朶・右耳の上縁が後補されており、定印を組む左右の第一指の指先が破損し、膝前の裳先を欠失している。そのほか肩口や左袖口付近そのほか地着きの部分に補修された所があり、虫食いも随所に見られるが、良く旧状を保っている。

総高	46.0	種	面幅	9.7	種	腹厚	15.7
髮際下	40.0	種	肩幅	24.7	種	肘張	30.7
面長	9.3	種	胸厚	12.8	種	膝張	37.2

資料紹介 4

銅造如来坐像 高麗時代

唐津市大字山田 薬師堂

本像は山田の福尾清三郎氏宅の庭脇にある小堂宇薬師堂に安置され、釈迦如来と称されているもので、頭には螺髪をたき、眉間には木材に金箔を貼った後世補充の白毫をはじめ、通肩の納衣を着けた如来像である。左手は肘を曲げ腹前に差し、すべて第一指と第四指を捻じ、右手も肘を曲げて掌を前に向けて立て、左手同様第一指と四指を捻じて下品下生の印を執っている。結跏趺坐をした足組みは右足を外側にし、後補の木製蓮華座上に坐っている。光背はすでに失われていて現存しない。

各部について眺めてみると、頭部は肉髻の盛り上がりがなく円頭形で、螺髪は小粒であり、髮際から頭頂にいたる正面中央部には大きめの肉髻鬘を嵌めた孔が穿たれている。

面相は円形に近く、丸々として量感があり、太く短い首につけられた二段になった二道とくびれた頸の表現は、他に例を見ぬほどの肥満の相をつくっている。また両肩は大きく弓状を描き、両眼はゆるやかな弧線を上下に組んで両顔をつくり、眦を比較的に水平につくっている。見開きは如来形としては大きい方であろう。鼻や口唇は小さくつくっている。耳は大きく長く、耳葉は太く厚目にして垂れている。

髀部は面相と同様に量感があり、膝の厚みや、組んだ足の足首などにそれが目立っている。ただ両肩の張りは少なく、いわゆるなで肩である。納衣は通肩で腕をU字形に大きく開き、その中央には襷衣の紐の結び目があるわきされ、肩から垂れ膝にかかる天衣の褶襷は割合に薄く表現されているが、そこには型にはまった作風が感じら

れる。現存する指は頭・髀部に比べるとすんなりと伸びやかである。残念なことに右手第3・第5指・左手第2・第3・第5指は指の関節部から欠失している。

本像は造型による一鈔と思われるが、技術的には未熟な面を残している。すなわち、前面には右の耳下と、足組みした膝前中央の衣文のころには湯がまわらずに大きな穴をあけており、特に後頭部は螺髪の色を鈔出すことが不十分であったがためにその部分をたがねで削り落としていた。一ほう背部は両耳後方の後頭部と、襟元から両肩の後ろを通して裾に至る部分に不整の接合面が残っている。特に背面のこうした痕跡は、本像を一気に鈔上げるまでにはならず、ある時間をおいて再び湯をかけた、つまり、先ず本像の前面に湯を流し込み、次いで後背部に湯がまわるように注いで完成したことを物語っている。

この像は指の一部を欠くほかは大きな損傷はないが、後に火災に遇っており、右側臀部に焼けて破損した部分が残っている。

ところで本像の制作は前述の通り肉髻部が省略された円形の頭部、円形に近い面相、肥満した髀軀、類形化した衣文等から推して高麗時代後期頃であろう。

『唐津拾土記』には、山田薬師由来として

・山田村寺部田四兵衛と言う者の屋敷内に、唐金の坐像の釈迦有り、量目十三貫あるよし、後ろに、奉明造、嘉曆三年、戊辰十月廿日治文・奉彰師之白・十八年奉彰師受、慶長十八年願主山田新三郎とあり、同所に往古唐金の薬師有りしを盗人取し去るより、尤も釈迦より細し本尊なりよし、台の小歌に、帯の短し、たすきに長し、山田薬師のかねのつなとあり、霊仏也と云云ふ、古仏の薬師は三河守奈某の時代と見えたり、今残る釈迦の像は遙かの後の新仏と見へたり。

との記載がある。この由来記に出て来る釈迦如来は、今日地元の人たちが釈迦如来と称している本像のことかと思われるが、これはは先の銘文は見つからなかった。また唐津拾土記には、本像のほかにもう一軀の銅造の薬師像が本尊として安置されていたことを伝えている。本像が朝鮮半島からの請来された銅製の仏であることを思うと、失われた薬師像もまた請来仏であった可能性も考えられ、興味あることである。ここ薬師堂には、今では先の銅造薬師像に代わり、室町時代の作風をもつ木造薬師如来立像が安置されていて、在郷の人たちによって篤く尊崇されている。

像高	64.0	種	腹厚	21.5
面長	16.0	種	肘張	32.5
面幅	13.8	種	膝張	46.2
面奥	16.6	種	膝奥	42.5
肩幅	25.5	種	膝高 (寸)	9.7
胸厚	17.5	種	(寸)	8.5

(文責、志 佐 禪 彦)

1 木造阿弥陀如来坐像
鳥栖市幸津町天満宮 薬師堂



▲ 側面



◀ 底板銘

2 木造阿弥陀如来坐像
佐賀郡川副町南里 正定寺



▲ 膝前の矧付部



▲ 側面



◀ 背面

3 木造阿弥陀如来坐像
鳥栖市田代町 西清寺



◀ 像底

4 銅造如来坐像
唐津市山田 薬師堂



◀ 像底

資料紹介 5

オジロワシ

ワシタカの仲間

肥前国産物図考にカタジロワシの図がある。これは江戸時代中期〔安永2年(1773)～天明4年(1784)〕唐津藩藩士木崎竹軒が、玄界灘に浮かぶ馬渡島で、この島では食用には使用しない鹿の肉を使い、呼びよせて捕殺する状況の中に、このカタジロワシが明確に描かれている。

しかしカタジロワシは現在日本の野鳥図鑑では、全国で10回位の確認例しか記載されていない。

本県においてワシタカの仲間の生息数は極めて少ない。戦後はとくにその数が減少したようである。海岸とくに玄海の海岸、漁港にみられるワシタカは大部分がトビである。

県内では現在まで知られているワシタカの仲間はミサゴ、トビ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、サシバ、チュウヒ、ハヤブサ、チョウゲンボウがある。オオワシ、イヌワシおよびこの資料のオジロワシなどは極めて少ない記録しか残っていない。

しかし対馬の上県町はワシの渡来地として長崎県天然記念物指定を受けているので、相当数のワシ類が渡来するようである。本県の有明海干がたには魚貝類が多いので冬期はカモ類、春秋はシギ類、その他サギ類が集まる。強力なこの類の飛翔力からすればこれらの水鳥を求めてたびたびワシ類が飛来している可能性が充分考えられる。オオワシは昭和6年、川副町犬井道の松の太木にと

まりカモを引き裂いていた処を射殺してその剥製が佐賀大学教育学部に保管されている。この剥製は当時佐賀師範学校教諭の職にあられた関谷国英氏がつくられたもので、50年に近い歳月を経過しているため、いたみはひどいが、日本的な資料である。また昭和8年にも北川副でシラスギを捕食していたオオワシが捕獲されている。この2羽のオオワシはペアであったろうといわれている。

オジロワシ

この資料は当館で保管しているがワシの仲間でも大型に属し、この資料は測定したところ翼長600ミリ、嘴峰50ミリ、跗蹠120ミリである。食性は魚類(サケ)、鳥類(カモ、カモメ、シギ、サギ等) 獣類(ウサギ、ネズミ、キツネ等)である。採取された場所は昭和50年12月3日、伊万里市大川町駒鳴字稚立2914番地のみかん畑で、ウサギか野鳥類を求めて地上か、樹上においていたのではなかろうか。

オジロワシは北海道以北の寒い地方で春夏に繁殖し、冬は南下する。冬の期間に対馬にも渡来し、ときたま本県に現われるようになるわけである。雌雄は同色であるが老幼は異色で雌が大形である。特徴的なものとしてその名の由来のように尾羽が白色で12枚から成っている。尾羽も幼鳥の時は褐色であるが、だんだんに白色が増え3年で純白色になるのが普通だと言われている。佐賀大学に保管するオオワシとともに、このオジロワシは本県内に飛来したワシの仲間の貴重な確認資料である。

(文責、手塚静雄)



オジロワシ 頭部の部分



オジロワシ 当館に保管



肥前国産物図考のカタジロワシ (第二帖より)



川副町犬井道のオオワシ 佐賀大学保管

博物館日誌 (55. 2. 1~55. 5. 31)

2月1日	鳥栖安永田出土銅鐸鋳型特別展 (11日迄)	4月23日	古賀志雄遺作到着
2月8日	刀と歴史展 (17日迄)	5月11日	青年の日茶会 (表千家談交會青年部)
2月21日	佐賀大学卒業制作展 (24日迄)	5月17日	黒田清輝展開場式 (6月8日迄)
2月23日	博物館協議會	5月25日	黒田清輝展講演會
3月1日	玄界のくじら捕り展 (23日迄)	講師	東京文化財研究所主任研究官 陰里鉄郎氏
3月10日	相知岸岳洞穴発掘調査開始	演題	「黒田清輝と近代日本洋画」
3月27日	博物館協議會	5月27日	九州博物館協議會理事会
4月1日	職員異動	5月28日	九州博物館協議會總會
4月2日	緑光会展及びスケッチ大会 (6日迄)	5月29日	九州博物館協議會研修會
4月18日	中華全国青年聯合會副主席李海峰氏他4名來館		

行事のお知らせ

常 設 展 (原則として月曜及び祝日の翌日休館)

佐賀県の歴史と文化展	6月15日(日)~9月25日(木) 56年	大 人 50(30) 大・高生 30(20) 中・小生 20(10)	佐賀県の地質や自然および先史時代から現代にいたる歴史と文化についての、理解を深めるために自然史、考古、歴史、美術工芸、民俗の各部門について、系統的に資料を展覧する。
	2月11日(木)~3月31日(木)		

企 画 展 (原則として月曜休館、月曜祝日の場合は火曜休館)

展覧会名	会 期	観 覧 料 ()内は団体料金	展覧会名	会 期	観 覧 料 ()内は団体料金
七夕書道展	8月1日(金)~ 8月5日(木)	無 料	佐賀県高等学校芸術祭・書道・美術部門展	11月28日(金)~ 12月4日(木)	無 料
佐賀県書作家協会展	8月7日(木)~ 8月10日(日)	無 料	佐賀県学童美術展	12月11日(木)~ 12月16日(木)	無 料
九州新工藝展	8月21日(木)~ 8月31日(日)	無 料	未 定		
理科作品展	市・9月13日(土) ~9月17日(木) 県・9月19日(金) ~9月25日(木)	無 料	書 初 展	1月17日(土)~ 1月21日(木)	無 料
			佐賀県勤労者美術展	1月31日(土)~ 2月5日(木)	無 料
九州の文化展	10月4日(土)~ 11月3日(日)	大 人 400(300) 大・高生 200(150) 中・小生 100 (70)	九州グラフィックデザイン展	2月10日(木)~ 2月15日(日)	無 料
			佐賀大学卒業制作展	2月21日(土)~ 2月25日(木)	無 料
佐賀県美術展	11月15日(土)~ 11月24日(日)	大 人 200(150) 大・高生 100 (70) 中・小生 50 (30)			

各展示会は都合により変更されることがあります。

博物館報	第 49 号
発行年月日	昭和 55 年 7 月 15 日
編 集	永 原 正 隆
発 行	佐賀市内 1 丁目 15~23
	佐賀県立博物館
印 刷	佐賀印刷社